

臨床に活かす病理診断学 消化管・肝胆膵編 第3版 福嶋敬宜, 二村 聡(執筆)

手稲溪仁会病院教育研究センター顧問/亀田総合病院消化器内科顧問

真口宏介

臨床医に役立つ手元に置きたい一冊

臨床現場において「病変の質的診断」は治療方針の決定に直結するため極めて重要である。特に、消化管、肝胆膵領域では悪性病変の頻度が低くなく、常のがんを念頭に置いて鑑別診断していく必要がある一方、がん以外の腫瘍や良性病変も存在するため慎重な診断が求められる。質的診断は画像診断と生検や細胞診などの病理診断の両者によって行われるが、ここに「落とし穴」があることを知っておく必要がある。臨床側では生検や細胞診の検体を病理に提出さえすれば確定診断が得られると考えている「勘違い」の医師が多いが、種々の理由によるサンプリングエラーがあること、肝生検やEUS-FNAの場合には腫瘍細胞の播種の危険性があることも忘れてはならない。片や、病理側では病理医の中でも専門性に差があること、HE染色だけでは確定診断ができない病変があること、病理判定の中にもグレーゾーンがあること、そしていまだわかっていない病態や病変も存在する。この「落とし穴」を埋めるために臨床医も病理を学ぶ必要があり、かつ病理医との連携を深めることが重要となる。

『臨床に活かす病理診断学—消化管・肝胆膵編(第3版)』が医学書院から出版された。本書には、病理医だけではなく、臨床医が知っておくべき内容が満載である。入門編、基礎編、応用編で構成されており初学者にも理解しやすい。中でも入門編の「Q & A」、基礎編の「特殊染色の基礎知識」、見返しの「使用頻度の高い組織化学染色」は臨床医、研修医に大いに役立つ。「抗体早見表」や資料編として「病理診断用語集」も読者にはありがたい。

執筆者の福嶋敬宜先生とは日本消化器画像診断研究会にて知り合った。本研究会には、肝胆膵を専門とする消化器内科医、外科医、放射線科医、病理医が一堂に集まり、一例報告を数十例にわたり議論し、いかに「臨床医と病理医との連携」が大切であるかを学んでいる。本書はそこに参加されている病理医の福嶋先生だからこその一冊であり、「臨床の現場に病理の情報をしっかり伝え、それを診療に十分に活用してほしい」との思いが込められている。

臨床現場での画像診断は病理のマクロ像をイメージして行うものであり、マクロを知らずして画像診断は行い得ない。そしてマクロはミクロ像が集まって作られるものである(入門編のCoffee Breakに記載されていた)。臨床医は、少なくとも主な腫瘍のマクロ像と病理学的特徴をしっかりと学んだ上で画像診断を行う必要があり、「検体を病理に提出すれば診断を付けてくれるとの勘違い」に終止符を打つべきである。検体を採取する前にどのような診断をしたのか、どの部位からどのように検体を採取したのか、それらの情報を正しく病理医に伝えることが重要であり、「より正確な診断と適切な治療方針の決定」につながることを肝に銘じてほしい。本書は、まさに「臨床に活かせる」病理診断学の解説書であり、臨床医に大いに役立つまさに「手元に置きたい一冊」である。



●B5/頁 280/2018 年
定価：本体 8,000 円＋税
[ISBN978-4-260-03553-8]
医学書院 刊